

目次

はじめに ……6

序章 人は表現の態たいにて生きる ……7

心癖を無くすことはできない／表現の基準は自分の思い／先のごとは心配無用／苦痛は生きるための警戒信号／苦痛には原因があるという思いが／生活の中の苦痛は／心癖は悪いことではない／表現の評価基準／表現の基準としての真実／「みおしえを守る」ということは／なくて七癖あつて四十八癖／感情の出方には一定の筋道がある／みおしえの功德／誠の表現の道しるべ／観念の遊戯に陥らないために

第一条 人生は芸術である ……44

神業は自己表現の所与条件／自由な対応を妨げるのは／芸術生活とは／人間表現に共通の要素／自己不在の表現は無価値／目を向けると心がこもる／心を行き届かせて初めて芸術になる／実行律ということ／内容律と形式律の一致を探索

第二条 人の一生は自己表現である ……73

自己は他己である／自己は対象との間に現れる／人生は意志決定の連続／より良い対象との関わりを／今を生きる／PLの教えは自己表現のためにある／物事の面白さは自ら発見するもの

第三条 自己は神の表現である ……96

自己とは何か／「神の表現」とは／神律は人間存在の自然法則／「人を生かす」ということ／神に生かされている自己／我執を捨てて誠の表現を／潜在能力を働かせるには

第四条

表現せざれば悩なやみがある

…… 118

人は表現の態にて生きる／意欲は後から付いてくる／誰でも誠の生活はできる／一時一事ということ／気が付いたらすぐ行動／一にも実行、二にも実行、実行なくして何の教えぞ／神業に順応する工夫

第五条

感情に走れば自己を失う

…… 134

自己表現のための教え／好き嫌いは練習量の違い／感情には筋道がある／心癖には具体的対象がある／都合の良いことばかり望んでいる？／対象を価値付けない／自分の都合は後回しに／いかなる神業も喜んで受け止める／結果は神様からの授かり物／心癖の筋道はいつの間にかできる／「みおしえ」を実行するために

第六条

自我無きところに汝なんじがある

…… 157

我執を捨てて踏み行う／実践してこそ生きる教え／素直になる方法は／強情を取る修行／あるがままに受け止める／神業のまにまに生きる／神から与えられた人間力／「汝がある」の「汝」とは

第七条

一切は相對と在る

…… 174

世界の構成原理／唯一の存在である人間の仕事／神は日に日に育て太らせ給う／最良の関わりとなる創意工夫

第八条

日の如ごとく明あきほかに生きよ

…… 183

太陽を神と信じる信仰／秘密は「日満る」ということ／神慮を信じて生きる／幸福への道を歩むには

第九条

人は平等である ……192

人は日止である／あるがままを受け止める難しさ／不足はつまらない／人は人、自分は自分／善悪でなく上手下手の基準で

第十条

自他を祝福せよ ……201

対象と自己との調和／他己としての自己とは／短歌制作の第一歩／人のためを図る

第十一条

一切を神に依れ ……210

神様にお願うこと／一つ一つに意味がある／対象に生きるには

第十二条

名に因つて道がある ……219

名は働きを示す／名に因つての道とは／ペットとの関わりも／立場にふさわしい自己表現

第十三条

男性には男性の、女性には女性の道がある ……228

生理的構造の違い／愛情表現の違い／愛される愛情表現／愛情を育てていくのは自分／愛する動きと愛される動き

第十四条

世界平和の為の一切である ……237

相手の幸せを願う心／人類愛が平和の基／いじめの無い社会を／真理が当たり前の世の中に

第十五条

一切は鏡である ……246

一切は芸術の素材／起こってくることは同じでも／当たり前前のが楽しい

第十八条 一切は進歩発展する …… 255

さまざま問題を抱えながら／有為転変は世の習い／一喜一憂しないということ／皆人を生かすためのもの／物事はすべて日々新た

第十七条 中心を把握せよ …… 264

物事には中心がある／職業とは何なのか／生きがいは職業にある／単発的な喜びと永続する喜び／中心趋向の原理

第十八条 常に善悪の岐路に立つ …… 273

善悪の基準は何か／方向性が善悪を決める／いつも緊張して暮らすと／善は人間としての本性を生きること

第十九条 悟るすなわち即立つ …… 282

怠けていると言われても／気が付いたことしかできない／自然の姿を芸術に高める

第二十条 物心両全の境に生きよ …… 291

お金自体に価値は無い／お金に好かれる心境／使った分だけ幸せに／お金のことで感情に走るの
は本末転倒／辛・不幸をもたらす違い／お金に対するスケールとは

第二十一条 真の自由に生きよ …… 300

自由は万人の欲求／思いが自分を束縛している／神に依ることの必要性／自由に誠を表現する幸せ

あとがき …… 309

はじめに

「人生は芸術である」というPL理念については、PL会員であれば誰でも知っていますが、「日常生活の中でPLの教えを実行しています」と自信を持って言える人はそれほど多くないようです。

PLの教えは素晴らしいけれど、自分には実行が難しいという思い込みが、会員さんの中にあるのかもしれない。

もし、教えは知っているが日常生活の中で教えの実行を心掛けていないということになれば、PLの教えも過去の修身・道徳とあまり変わりはないことになります。

PLは実行の教えです。実行すればそれだけの効果がある教えです。そこで、どうすれば暮らしの中でPL処世訓を実行することができるか、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

序章

人は表現の態たいにて生きる

心癖を無くすことはできない

PLの教えの根本は「人は表現の態たにて生きる」ということにあります。

私たちは、自分という存在は生まれてから死ぬまでずーっと続いていると思つていますが、その生きている姿は何かをするという形（表現の態）をとっています。

生まれたばかりの赤ちゃんも泣いたり手足を動かしたり、いろんなことをします。もし何もなかったら、その赤ちゃんは大丈夫かと皆が心配するでしょう。そのように、人は何かをするという形で自分の命をこの世に表しているのです。

そして、人間の表現は、今という時間の中でしかできません。どんなに素晴らしい人でも、昨日してしまったことをやり直すとか、明日のことを今することはできないのです。ところが私たちは、自分の人生が「今」という時間の中に集約され、今に自分の生命の表れがあるということを意識しないで暮らしています。

今という時間に自分の人生が懸かっているなどと言いますと、多くの人は「毎日毎日そんなに緊張して暮らすことはできないし、とてもじゃないがそんな窮屈な人生はごめんだ」と言うでしょう。

そのような思いを持つことがPLの教えを錯覚する元になっているのです。

私たちは、道という言葉で、模範的な立派な行いを思い浮かべるように教育されてきました。

そのため、PLの教えも儒教のように、「こうすべきである」という道を示しているもののように理解し、理想的な立派な人間になることが道を守ることだと考えているようです。

そういう視点から、腹を立ててはいけない、不足を思っではいけない、という教えの言葉を理解しますと、腹の立たない人間、不足を思わない人間になることが道を行じることだと思ってしまうことになります。

PLの教えは「人は自由な存在である」という認識に立っています。現実の社会に起こるすべての出来事は人間がしでかしていることで、そういうことをする自由も与えられているのがその証拠です。同時に、人間は社会生活をしていますので、社会生活に適応できない人間は法律によって取り締まり、ほかの人の安全を守るようにしているわけです。

言い換えれば、善も悪もしようと思えばできる自由が人間には与えられているので

す。しかし、その自由は、ほかの人との共同生活を前提にしての自由ですから、社会生活の安全を保つために、個人の自由にはある程度の制約が加えられることになります。その制約が法律などによる個人の行動の規制ですが、法律に抵触しない限り、人間は自由に表現してよいのです。

PLの教えは、この与えられている自由を最大限に謳歌おうかし、楽しく愉快に人生を送るためにはどのように心掛けていけばよいかという、人間本来の表現方法を一人一人にお教えるためのものです。

表現の基準は自分の思い

「人は表現の態にて生きる」と言いましたが、表現は今という時間の中で、自分の前に現れてくる対象（人や物事）と関わりを持つという形を取ります。その対象に対してどういう関わりをするかは、自分自身が決めることです。

自分が決めるといっても、そこにはいろんな要因があります。好みや都合もあれば、

置かれている立場、その時の状況、対象の持つている事情、それらのいろんな要因を考え合わせて、どういう関わりを持つかを決めて（意志決定し）、その思いをどう表現すれば一番好ましい関わりを持つことができるかを考えて、表現するわけです。

従って、その時の表現の善しあしを判断する基準は、こういう関わりをしようと決めた自分の思いです。その思いが十分に表現されているかいないかが、その時の表現の善しあしを判断する基準になるのです。

ところが、儒教的善悪観では、人間の歩むべき道はこうであるという規範を判断の基準にしていますので、道に外れた行為は悪であるということになります。腹を立てて、自分の思いを十分に表現できなければ悪いことをしたということになり、自分自身を責めたり、悔やんだりすることになります。

しかし、思いを十分に表現できないということは、善悪の基準で判断すべきことではなく、上手・下手という表現技法の問題に過ぎないのです。

表現の拙さ自体は、善いことでも悪いことでもありません。ただ上手か下手かという表現の技法上の問題で、下手な表現はその結果が自分の望む通りにならないという点で問題となるだけです。